

カウンセリングの技法と実際

ピア・サポート

—お世話活動を通した子どもの社会性発達支援



神奈川県横浜市立相沢小学校教諭
たなか・りょういち

田中涼一

私たちの学校が導入した「日本のピア・サポート・プログラム」は、子どもに相談活動をさせる、いわゆる「ピア・カウンセリング」(ピア・サポートと称するものも含め)とは異なり、むしろ「脱カウンセリング」という点に特徴がある(1)。それゆえに、「カウンセリングの手法」として扱われることには、いささか抵抗がある。と言うより、カウンセリングという言葉が多様な意味を持ち、その時々で都合よく用いられている現状では、安易にそのままとめられてしまつては誤解が広がるだけ、と危惧している。

「日本のピア・サポート・プログラム」は、臨床心理士等の専門的カウンセラーが中心になって実施するものではない。また、教育活動であるから、カウンセラーのまねをしたがる一部の教師が実施するものでもない。強いて言うなら、子どもの発達を支援するために児童生徒理解を心がけるといふ意味においての「カウンセリングマインド」とは、重なり合う部分が大いと思われる。

本稿は、「日本のピア・サポート・プログラム」に即してなされた実践を紹介することにより、教師の持つべきカウンセリングマインドとはどのようなものなの

か、それは教育活動をどのように変えていくものなのか、その具体例を示そうとするものである。

プログラム導入の契機——小中学校の連携協力

私たちの小学校から送り出した子どもは、中学二年生頃になると問題行動が目立つ典型的な中たるみ状態を、毎年のように繰り返していた。しかし、それを目の当たりにしても、小学校の教師は、その「くずれ」は自分たちには関わりないこと、というスタンスを崩そうとしなかった。小学校では精一杯やってきた、悪くなるのは中学校に責任がある、と考えてきたのだ。

三年前、私が送り出した卒業生もやはり例外ではなく、それを残念に思っていた頃、彼らの進学先のA中学校の教師と子どもたちの様子について意見交換をする機会を得た。そして、お互いの学校に何度か足を運びあう中で、次のようなことがはつきりしてきた。

一、中学校で子どもたちが(悪いほうに)変わっていく原因の一つに、「負のピア・サポート」(先輩たちからの悪い影響力)が関わっていること

これについては、子どもを学級の中に抱え込み、何とか問題が起きないようにしてきた小学校の教師には

わかりにくいことである。

二、小学校時代の子どもの「良さ」が中学校では十分に生かされていないこと(小学校のときは、けん玉やこま回しが上手だった、面倒見がよかった、係活動では教室の掲示物をととても工夫していた、サッカーが得意だった、等)

これについては、日々、対症的な生徒指導に追われている中学校の教師には見えにくいことである。

そして「互いに責任を転嫁しあっている問題も決しない」、小中連携で義務教育の九年間を見通した計画的・意識的な取り組みには、子どもたちは変わりたいとも変われない」との共通認識に至った。

具体的には、中学生の「良さ(小学校時代に育んできた)」が生きる取り組みをしようということであり、たとえば「小学校のクラブ活動に、中学生(希望者)を参加させ、彼らの良さを発揮させられないか」というアイデアが生まれたのである。

中学生をジュニアリーダーに

そうしたときに出会ったのが、「日本のピア・サポート・プログラム」である。それは、これまでの教育活

動の、「何を」「どのように」変えれば「子どもが育つ」仕組みになるのかという「学校づくり」の試みを、論理的、実践的に提案しているものであった。

このプログラムに基づき、私たちが実施することにしたのは、小学校のチャレンジタイム（クラブ活動）を中学生が育つ場として位置づけ、小中の教師で中学生を見守り育てる、というものであった。

これは、決して小学校の教師が楽をするためのものではない。ジュニアリーダーとして小学生の「お世話活動（他の人の役に立つ活動）」をする中学生が、「自己有用感」（他者との関係の中で自分の存在を価値あるものと受けとめられる感覚）を獲得し、社会性の基礎が築かれていくためのものである。

今の子どもたちの社会性や対人関係能力の低下という問題は、知識やスキル（技能）だけをいくら教えこんでも解決していかないと思われる。頭で理解していることを実際に行動に移すためには、それなりの動機や意欲が必要だからである。「日本のピア・サポート・プログラム」では、「自己有用感」がそうした動機や意欲の核になると考えている。中学生がそれを獲得する場所として、小学校のクラブ活動の時間を活用したの

が、私たちの実践なのである。

小学校独自の「お世話活動」

さて、小中連携をきっかけにして導入することになった「日本のピア・サポート・プログラム」であるが、相沢小学校では小学校独自でもそれに取り組んでいる。それは、「六年生が変われば、学校全体の子どもが変わる」という視点で行う、六年生の「お世話活動」の取り組みである。

(1) 「だれの」「何を」育てるのか

これは、「この活動を通して、六年生全員が自己有用感を持つことができ、『六年生の社会性が育つ』ならば、下級生にもよい影響を与え、最終的には全校児童が互いに育ちあう学校に変わるであろう」という考えを全教師が認識しあつての実践である。すなわち、まずは「六年生全員の」「自己有用感を」育てるために取り組まれる「お世話活動」なのである。

(2) 「ピア・サポート・プログラム」の年間計画

表からもわかるとおり、「ピア・サポート」として位置づけられた活動は、すべて六年生と一年生の組み合わせで行う。「できのよい」子どもだけでなく、すべての六年生が「自己有用感」を獲得できることがねらいなので、お世話される側との学年（年齢）差は大きい方が好ましい、と判断したからである。また、「領域

「2」の活動では、その時間内の活動だけではなく、事前の計画・準備や事後の「ふりかえり」にも、子どもが満足いくまでゆっくり話し合えるよう、時間をしっかり保障する必要がある。幸い、この取り組みは教師主導のトレーニングでは終わらない。「お世話活動」に取り組むことを通して、他人との関わりあいについて、子ども自らが課題を見つけ解決を図っていくことが目的である。そこで、十分な時間が確保でき、教育目標も明確にできるよう、「総合的な学習の時間」に位置づけて取り組んでいる。

「お世話活動」の展開と留意点

表に示した「領域2」の①、「朝自習の時間にお世話活動しよう」の活動は、四〜五名ずつのチームでのお世話活動である。六年生にとっては初めてのお世話活動になるので、一年生とうまく関われるか心配に思っている子どもにも配慮してのものである。この段階では活動をリードする者とそうでない者の違いはでるが、自分たちの考えた計画に沿ってチームでそれぞれのお世話活動をやり遂げることに満足感を持たせたい。「給食もお世話してあげたいな」の活動になると、どの

表・「ピア・サポート・プログラム」の年間計画

- ◎「領域-1」のトレーニング：5年生の3学期に実施
 - トレーニング8コマを通して体験的に学び、最高学年として、「お世話活動」に取り組めるよう、「下地づくり」をする。（詳細は文献(2)を参照）
- ◎「領域-2」のお世話活動：6年生の1年間を通して実施
 - ①「1年生と仲良しになろう!!」
 - ・朝自習の時間にお世話活動をしよう。
 - ・給食もお世話してあげたいな。
 - ②「ふれあいスポーツフェスティバル（運動会）」
 - ・1年生といっしょになかよし競技、なかよしダンスをしよう。
 - ・応援もいっしょにやろう。
 - ③「相沢まつり」
 - ・1年生といっしょに学校を回ろう!!

置づけられた活動は、すべて六年生と一年生の組み合わせで行う。「できのよい」子どもだけでなく、すべての六年生が「自己有用感」を獲得できることがねらいなので、お世話される側との学年（年齢）差は大きい方が好ましい、と判断したからである。また、「領域

「子ども給食を食べはじめて五年間という実績を生かし、余裕を持って活動し、グループでの会食を楽しむことまでできるようになる。」

「領域1-2」の②の活動は、いよいよ一対一のバディの活動である。「わたしのお兄さん」「ぼくのお姉さん」と慕われ、最も「自己有用感」を獲得することのできるチャンスであるが、一人では不安を感じる子どももいることであろう。バディの組み合わせについては、一年生と六年生の担任が綿密に情報交換を行い、慎重に決めていく必要がある。

このように「配慮」・「慎重に」と強調すると、「子どもは失敗することで育つ」「そんなに甘やかすことはない」等の意見が聞かれたりもする。はたして、私たちの前にいるのは「失敗を成功の糧にすることができ」「子どもばかりであろうか、まずは「失敗を成長の糧にできる」ような「心のゆとり」をいかに育てるのか、が論じられなければならないと考える。

おわりに

昨年度の一年生の保護者が担任に寄せた手紙を紹介し、本稿を終えることにしたい。

『娘は一人っ子で、バディの相手が男の子だったので、すぐになつくかしら……などと心配していました。その心配は必要ありませんでした。いつもいつも娘の目線に下がって話を聞いてくれるMちゃんが本当のお兄ちゃんのように大好きな娘です。この、「目線まて下がって」というのは、親でもついつい忘れてしまいがちですが、バディを組むたびにその様子を見て感心していました。彼に限らず、六年生全員が一年生と身長差を縮めて会話する姿に感動した一年でした。きっとこの思いはそれぞれ受け継がれ、娘が六年生になったとき、それは反映されるだろうと、今から楽しみです。素敵なお兄さん、お姉さんに乾杯です!!』

〔参考文献〕

- (1) 滝充『日本のピア・サポート・プログラム』とスクールカウンセラー』『臨床心理学』二〇〇二年一月号
- (2) 滝充(編著)『ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編』金子書房、二〇〇一
- (3) 滝充(編著)『ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編』金子書房、二〇〇二